『曹洞宗の展開と地域社会―總持寺教団を中心として―』

駒沢大学教授　廣瀬　良弘

ただいま過分なご紹介をいただきまして恐縮しております。地域社会と曹洞宗の関係ということに論点を絞りましてお話しをしたいと思います。資料には始めに曹洞宗の展開の特色を書いておきました。東海、関東、甲信越、奥羽地方、すなわち東日本に曹洞宗の寺院が多く展開していった。中国あるいは九州地方にも展開いたしました。ただ、九州では廃仏毀釈が激しくて、その後の展開がみられなかったというようなことがございます。宗派の発展にはそれぞれ特色がございますけれども、日蓮宗は京都の町衆などとの関係で展開を遂げた。それから浄土真宗は畿内あるいは北陸等、どちらかというと農業が進んでいた、先進農村地帯に展開していった。受容者は先程の日蓮宗が京都の町衆のような職人層、商人層であったのに対し、浄土真宗は農民や在地武士であったということが言えます。それに比較しますと曹洞宗はやや山間部、後進農村地帯、そして在地の武士、上層農民あるいは村々の人々というようなところに壇越を求めて展開をしたということが言えるかと思います。

本日は地域社会との関係ということで、ひとつは禅僧たちが地域の神たちに戒を授けていき、そのかわりにお寺を建ててもらう。敷地を提供してもらったり、案内してもらったり、あるいは温泉を湧かしてもらったりというよ

うな地域の神に戒を授けて弟子にするという、神人化度の話。それから、地域の秩序維持、主従・同盟・一族関係と禅寺の役割というような問題。それから、特に戦国期における禅僧が、戦乱の世の中をどういうふうに生き抜いていったかというようなことについてお話したいと思います。それから駆込み寺の問題。さらに寺と薬の話、これは曹洞禅僧たちが朝廷より永平寺や總持寺の住持辞令ともいうべき綸旨を受けに行った時に京都における宿寺となり指南をした道正庵との関係の話しです。それから授戒会、葬式（葬儀）、さらに瑞世と両本山。今、詳しいお話が圭室先生あるいは納冨先生からございましたし、これからの伊藤さんからも言及されるかもしれませんけれども、ポイントを絞りまして瑞世と両本山の問題。それから戦国期に源翁派という擯罰を受けていた門派が、永平寺あるいは總持寺の瑞世を遂げようとする。両本山もそれを迎えようとする。そのような中での関東の大雄山門派の反発。そういうようなことについて見ていきたいと思います。

まず、発展は、今申しましたように北陸から全国へ展開する。これは今、お話いたしましたように瑩山禅師および、特に峨山禅師の弟子の方がた、道元禅師から数えると七世代目になりますけれども、そういう方々の全国への展開というようなことが指摘できるだろうというふうに考えます。展開の時期と地域でございますけれども、先程も地域については申し述べましたが、東日本を中心に展開していった。ただし、それだけではなくて、中国地方や九州地方にも相当の展開を遂げた。ほぼ全国的な展開ということになろうかと思います。時期でございますけれども、これは南北朝が終わる頃から徐々にお寺が多く建てられていくようになっていきます。そして中心は戦国時代。さらに江戸時代初め頃まで相当数のお寺が建立されるということになります。そういう中で壇越の規模はしだいに小規模な武士になっていく。そしてついには住職、和尚がお寺を開く。寺伝を見ていきますと、それより降って江戸時代になってきますと、首座とか和尚よりも少し位の低い僧侶たちがお寺の開基になっていくということで、壇

越・開基はしだいに小さくなっていくというようなことが指摘できるかと思います。それから曹洞宗の寺院がどんどんできていく発展の時期と曹洞宗侶の語録などに葬儀の引導法語が増加していく時期が一致するのではないかというようなことが指摘できると思います。

続きまして、「曹洞禅の民衆化」ということでお話したいと思います。「瑩山和尚清規」の中に「病気に因む祈祷」という項目が入っておりまして、道元禅師の禅風と比べると少し転換してまいりまして、祈祷を導入するようになっていきます。その他、生きたまま穴の中に入って死を遂げるという入定を遂げる禅僧等々、密教僧と変わらないような行動をとる僧も出てきます。それから一休の「自戒集」を見ますと、瑩山禅師の弟子にあたる曹洞宗の明峰素哲が、俗人に印可を与えているというのです。大徳寺門派にもそういう者がいて困ったものだというような批判の目で見ております。京都近辺に簡単に印可を与えるような行動をとる者が曹洞宗にも存在したということになります。それから「薩涼軒日録」（長享二年〈一四八八〉六月四日条）という五山禅僧の記録を見ますと、そこには峨山門下の活動が書かれておりまして、峨山門下の多くは、地方のお堂やお宮の中に住んで、活動しているというようなことが書かれておりますので、五山の禅僧たちはそのように見ていたのだろうと言えます。それから連歌師で有名な宗祇の弟子に宗長という人物がおります。彼は今川氏に保護され、駿河の地域にも活動した連歌師ですけれども、その『宗長日記』を見ますと、このごろは「なまなまの参禅」で身を滅ぼす武士がいる。いいかげんな参禅で身を滅ぼす者がいるというのです。あるいは、その辺で活動している禅僧は「溝越天狗」だ。というのです。

つぎの源翁のエピソードは江戸時代の伝記には既に掲載されておりますので、それ以前から成立していたというふうに思います。『源翁能照和尚行状記』（続曹洞宗全書』史伝）の終わりの方に「大工道工作群集（大工道工群れをなしてあつまる）」ということでございまして、源翁は山陰地方にもお寺を建てておりますし、結城地方、それ

から会津にもお寺を建てております。おそらく、常に大工や石工たちを引き連れて動いていたんだろうと思います。史料にもありますように大工や道を工作する人たちが群れをなして、源翁和尚の周りにはいたというようなことが指摘できると思います。

この源翁のことは「禅寺と温泉」というところにも示しておきましたけれども、温塩（あつしお）の温泉とかかわりがあります。温塩の地域の神、示現寺の建っている地域の神を得度している。戒を授けている。その代わりに神が温かいお湯を出してくれたというのです。今の温塩温泉は、かなりさびれております。旅館も四軒くらいしかないですし、温塩の人にしかられるかもしれませんけれども、今はもっと小さくなっているかもしれません。その温泉の権利は示現寺が持っているわけであります。続きまして長門（山口県）の大寧寺、こちらは三世定庵という方が長門一宮の住吉神を得度して、法衣を授けているということでございまして、住吉神は御礼として深川湯本（ふかわゆもと）温泉という温泉を湧き出させております。この温泉の権利も大寧寺が持っておりまして、江戸時代などでは僧侶や武士が入るお湯と民衆が入るお湯とに分けて、寺侍が管理していたというような記録も残っております。こういうことで温泉と禅寺の関係、他の宗派の寺と温泉の関係もありますが、禅寺と温泉という関係も幾つかあるのです。このような事例はこれからもみつかっていくものと考えます。いずれにしても戒を授けている。授戒というのが曹洞宗においては相当の意味をもっていたということでございます。

続きまして、「禅僧の法要と地域社会」、地域で禅僧たちがどういう活動をしていたかということを見ていきたいと思います。中遠地域で明応七年（一四九八）に大災害がありました。嵐、雹が降ったり、大洪水、それから、大地震、浜名湖が海と繋がった大地震がこの年にございました。大津波も起っております。それらは『円通松堂禅師語録』（『曹洞宗全書』語録一）に細かに書かれておりまして、重要な史料です。本当に今の新潟の大地震のような

感じがいたします。松堂高盛という人がその中で説法を行っております。どういうことを言っているのかというと、事細かな災害のことがずっと書かれておりまして、最後に、出家は修行をきちっとやって戒律を守れということを言っております。それから在俗の人は三宝を信じ、儒教の道を実践せよと。これが人々が立ち上がれる、そして今後災害が起こらない方法である、と述べています。災害に立ち向かっていこうというような姿勢が見られます。その言い方については問題が色々あろうかと思いますけれども、そのような活動も行っております。

「在地の武士との関係」では、例えば在地武士の連合関係とか、主従関係、血族関係、一族関係等々の関係を利用しながら寺をどんどん開いていくというようなことが起っておりまして、そこに逐一書いておきましたのでご覧願えればと思います。こういう在地の武士たちはどうして曹洞宗の寺を建てていったのかという、受容された理由でございますが、ひとつは当然ですが菩提寺として、それから先祖の法要を行う場所として、その場は一族結束の場にもなるというようなことでございます。それから在地秩序の確認の場というようなことでございます。摂津と丹波の境にあります青原山永沢寺の史料を見ていただきますと、青野氏という永沢寺の麓にいます在地武士が、親類や僧侶を連れて寺にお参りに来ています。正月の挨拶に来まして、お風呂に入れてもらって帰るわけでございますけれども、寺のほうはどういうふうに対応したかといいますと、「青野殿」「位牌所ノ坊主」「殿原衆」という位の高い人たちは礼間という所で接待する。その対応者は、住持、維那・侍真、老僧衆二～三人という人たちです。それからもう少し身分の低い、ついて来た人たち、「中原衆」というのがいるんですけれど、上層農民、あるいは農民の有力者ということになるでしょうか、「殿原」が有力者だとすれば、それより少し低い人たちですけれど、これは侍香寮で対応する。対応者は侍香ということになります。それから「荷物持共」、これは在俗の人たち、荷物を持って来た人たちにはどういうふうに対応するかというと、庫下客殿すなわち庫裏で対応する、「誰成ナリ共」

対応しなさいというから、特に決まっていなくて、誰でもいいから対応しなさいというようなことです。そして風呂に入って帰っていくわけなんです。いわゆる在地の上下関係が正月の寺の挨拶の中ではっきりするということで、上下関係等々を確認し合って麓の里まで下りていくというようなことになると、こういうように見ることができると思います。

それから「地域の緩衝地帯」これは駆込み寺とか法要の場、それから子弟の教育の場。例えばこれは曹洞宗ではありませんけれども、今川義元が寺に一時いまして、兄が死去したりして様々な関係から還俗して当主になっております。このように寺に入って勉学するということでございます。それから独立のシンボルということです。一例だけ挙げますと、下総（茨城県）結城にいました結城氏と近くの下妻にいました多賀谷氏はもと主従関係でもありますし、同盟関係でもあります。養子を送り込んだりいろいろしておりますが、殺したり殺されたり非情な関係の場合もあります。ですから同盟を組みながらも騙したり殺されたりというようなことがございます。そういう中で結城氏の乗国寺と多賀谷氏の多宝院は本寺末寺の関係です。いろいろな事件がある中で調整役をもつとめていたと考えられます。成功した場合もありますし失敗した場合もあるだろうと思いますけれども、役割を果たしていたと考えられます。それからブレーンとして。これはいろいろございますが、例えば、上杉謙信と林泉寺でございます。上杉謙信の自画像が上杉神社にございます。この自画像の上に自分で讃をしておりますけれども、いわゆる代語形式と言いまして問容形式をとっております。これは禅の心得が相当にないと書けない讃でございます。

地域秩序との関係ですが「戸田全久置文」という古文書がございまして。これは菩提寺の全久院に与えたものでございますけれども、それを見ますと、農民が年貢逃れなどで逃散してお寺に逃げ込んできたら、元の領主へ、知らせなさいと言っております。ただし、「依事叶百姓之望」とありますから、「事によっては百姓の望みを叶えて」

場合によったら農民の言い分もよく聞いて、年貢をもう少し下げなさいとか領主と折衝してやりなさいというようなことを言っておりますので、寺院をいろいろな摩擦の緩衝地帯にする、すなわち調停役として期待していたということがわかるわけです。

「禅僧と戦国社会」でございますけれども戦国時代に禅僧たちはどのように頑張ったかということでございます。群馬県に長年寺という寺がございますけれど、そこの禅僧、受連が書いた文書があります。信玄が上州（群馬県）にやって来た。その時に彼は出向いていって禁制を貰っています。これは自分の軍隊が寺で乱暴した時には処罰しますというものです。ただ貰っただけでは駄目なので、それを持って彼は寺に留まって軍隊などと問答すること七年、刃に触れること一度、着ぐるみ剥がれたこと三度というような中で信玄の禁制を持ちながら、兵隊が乱暴したら信玄から首をはねられます、という文書あるいはそれを板に書いたものを掲げながらお寺を守ったということが書いてあります。「寺家門前二百余人」いたけれども全部逃げてしまった。残るは吾只八一人、山に臥し、里に隠れ、一身の稼をもって昔の屋体、すなわちこの寺だけが堅固であるというように書かれておりまして、本当に涙が出るほどの努力を戦乱の世の中でしている。大雄山の記録「雄峰大慈院年中雑用集」（『静岡県史』史料編中世）でございますが、これは秀吉から自分の軍隊が乱暴した場合には首をはねるという禁制を貰っています。おそらく、これを掲げて対抗したんだと思いますが、大雄山は焼き払われてしまっています。禁制は貰ったが失敗してしまった例です。それから「北条氏印判状」でございます。これは伊豆半島で活動しました寂用すなわち養真軒という人物が、八丈島に流れ着いた乗組員三八人の舟を北条氏まで届け出て、後でそれを貰い受けて三八人乗りの船を営業して利益を得るという、その許しを北条氏が与えている文書でございます。かなりの経営者といいますか、相当頑張る禅僧もいたようでございます。

それから「禅僧と地域権力・地域社会」ということでございますけれども、在地の秩序を確認したり、あるいは緩衝地帯になるというようなことは先程申し述べました。駆込み寺は網野善彦先生のご研究にもたくさんございますけれども、中世には各地域に駆込み寺が存在したということがございます。長年寺を開いた長野氏が壁書（掟書）を授けています。この決まりにはどのようにみえるかといいますと、たとえ重科人―罪の重い犯人―がお寺に逃げ込んでも、成敗いたしませんということなんです。寺に重要犯人が逃げ込んでも成敗いたしません。寺内に踏み込んでそこで殺したりはいたしませんということでございます。それだけお寺の聖域性を確保するということです。これは在地領主にとっては非常に危険なことです。例えば、殺人犯が逃げ込んでいるのがわかっていながら罰せられない領主ということになります。それに引き替えても、寺の聖域性を守るということになります。この時期一五〇〇年代初め頃には、先祖の眠る寺の聖域性を守るということの方が犯人を捕まえることよりは重要な事柄だ。地域を支配していく上で重要であるというふうに判断したのだと思います。そういうような寺院が長年寺ばかりでなくて、例えば薩摩の福昌寺、島津の菩提寺です。あるいは下妻の多宝院、多賀谷氏の菩提寺。あるいは下総の東昌寺、古河公方の重臣簗田（やなだ）氏の菩提寺、安房の延命寺、里見氏の菩提寺、等々がございます。戦国期も後半期になってまいりますと、地域の支配を行っていく上で犯人を捕まえなければ済まなくなってまいります。殺人犯が逃げ込んだのに捕まえられない、だらしないと、こういうことになるわけです。例えが悪かったかもしれませんけれど、そういうことになるわけですね。領主としては支配が非常に不安定になってくるわけでございます。領主がブレーキをかけても家来が許さない。結局は寺に踏み込みます。例えば、薩摩の福昌寺では、天正二年（一五七四）に、天草郡の志岐氏の使者を襲った山賊が走り入ったわけであります。志岐氏と島津氏はちょうど和平の交渉を結ぼうという時期であったわけです。その使者を殺した犯人が寺に逃げ込んだのです。おそらく島津氏の方針は手を握ろ

うとするわけですが、地元の人々はそうはいかないということになって、使者を殺してしまった。その犯人がお寺に入る。ついに踏み込みます。お寺の住職は渡さない。しかし島津氏の家来は踏み込んで殺してしまいます。駆込み寺の犯人を匿った住職は激怒し、寺外へ出てしまう。ここに駆込み寺の住職が出寺する。寺を出るということが起こります。福昌寺ばかりでなく、下妻の多宝院もそうです。慙死の刑を受ける者が走り込みます。住職は助命嘆願を願いますが、多賀谷氏は許さない。住持はついに犯人を出家させて他の寺に行ってしまいます。あるいは下総の東昌寺では、『逆心』ですから寝返ったのでしょう。敵方に寝返った本間氏という人物が寺に走り入ります。椋越の簗田氏は是非を顧みず成敗してしまう。住職はやはり寺を出てしまいます。簗田氏は寺を出てしまった住職に帰ってもらいたいということを願うわけであります。島津氏も最後は帰ってもらいました。多宝院も帰ってもらいました。それから東昌寺の住職も簗田氏がどうしても帰ってもらいたいと願っています。ついては堂を建て直して帰ってもらうというようなことをやっております。それから里見氏の二つの書状に「延命寺へ山林」とあるのはやはり殺人を犯して延命寺の山へ逃げ込んだ人物がいたことを示しています。里見氏の三点目の書状は上の二点とは直轄には関係がないようですが、何らかの理由で延命寺の住職が寺の外へ出てしまいまして、里見氏の当主が帰ってもらいたいといっている手紙です。地域の中で駆込み寺としての機能を果たし、それぞれの地域で活動していたということです。

次に「木下道正庵の薬と曹洞宗寺院」についてみます。瑞世の時に京都へ行って永平寺や總持寺の住職辞令というべき綸旨を朝廷より受けるのですが、そこで、あっちへ行ってこういうふうにお礼をしなさいなどと指南するのが道正庵という家でございまして、宿もつとめております。その家は薬も作っていました。これは總持寺の五院から諸山（諸寺）に出したものでございますけれども、靏千世という人物が跡を継ぐので了承してほしいということ

ですが、譜山へお見舞いとして解毒円を指す越す、すなわち寺々にもお見舞いとして、挨拶代わりに解毒円という薬を配るからよろしくというような書状を五院が出しております。ですから、寛永五年（一六二八）頃には薬を作っていた。あるいは、ここに示しませんが、慶長一二年（一六〇七）の頃にはすでに薬を作り販売しており、にせ薬が出るほどでした。この史料は寛永一七年ニセ薬が作られているというもので、詫びを入れております。薬売主あるいはその町の年寄りとかが皆であやまっているという史料です。次の史料は信濃国松代において、解毒円のニセが出回っているということで道正庵の手代がそれを発見し、罰しているというようなことが書かれております。松代真田家の菩提寺の長国寺や大林寺などが仲介に入って、何とか許してやってほしいという詫を入れてやっているようでありますが、ニセ薬が出廻っているというようなこともわかります。さらに次の史料は家来のものが、偽物は作りませんし、道正庵のために一生懸命やりますというようなことを誓っている文書です。全部で一四二名の家来がいたということです。この人たちが薬を作ったり、曹洞宗の僧侶の世話をしたり、いろいろなことをしてきたということがわかります。そしてこの史料は上州（群馬県）の方で薬を五〇粒ずつ配りまして、また来年来るからということで寺が五〇粒預かる。それを売った代金を次の年の五〇粒と引き替えにお金を渡すというようなシステムになっていたわけですけれども、その薬が偽物だったりして、いろいろもめごとが起こっているというような史料で、これも江戸前半期の史料でございます。こういうように薬を通じまして曹洞宗の僧侶は瑞世をした帰りにおそらく薬を貰って地域にもたらし、そこでの活動に生かしたりする。あるいは道正庵から、京都からやって来た薬を買って、それを檀家さんに分けたりして活動をしていたということでございまして、薬を持ちながらご祈祷すれば腹痛は治りますね。これはご祈祷のおかげだということになれば、お寺のイメージも上がっていくというようなことで、非常に重要な活動であったと思います。すばらしい仕組みになっていたということがいえます。「道正

庵文書」は現在永平寺に所蔵されています。数年後に出版する予定にしております（「中近世における木下道正庵と曹洞宗教団」『道元禅師研究論集』永平寺）

つぎに授戒会についてみてみたいと思います。この史料は瑩山禅師の直筆でございますが、『三木一草事』の巻末だけが瑩山禅師の筆で残っております。これを見ますと道元禅師は千人の人に戒を授けている。しかし五人にだけ伝戒を授けていると。懐弉禅師は六〇〇人、しかし伝戒は五人。義介禅師は三〇〇人、しかし伝戒は四人。瑩山禅師、ご自分ですけれども、自分は七〇〇余人に戒を授けた、授戒をやっているということでございます。そして、伝戒の弟子は一〇人余りいたけれども、（二、三人はおそらく亡くなったかどうかしたんだと思いますけれど）七人が今残っていると。今後まだ自分は授けていく、今後の数はこれからだと、こういうことを瑩山禅師が自分で書いておられます。道元禅師が大勢の人々に戒を授けたことは事実であったわけです。道元禅師を始めとして歴代の禅師様方が戒を授けてきたということでございます。

抜隊得勝（ばっすいとくしょう）は臨済宗の方でございますけれども、この方は孤峰覚明に参じたあと、峨山禅師に参じております。峨山禅師の所では、そこに参じていた古参の和尚から「戒法を授けてもらったほうがよい。戒法を受けて帰ったほうがよい。これは布教に必ず役に立つ。」ということを言われております。曹洞宗が授戒ということに非常に力を注いでいたということがおわかりになろうかと思います。知多半島の付け根にあります『血脉集』『小師帳』という授戒会の帳面がございます。今まで中世では授戒会が行われていたか否かわからなかったのですけれど、この帳面によりましてわかってまいりました。この帳面によりますと、一四七七年から一〇年間で七二四人に戒弟を出しております。それから『小師帳』という帳面には、一年足らずで九五人の戒弟が出ております。これを見ますと名前とかいろいろ出ておりますけれど、近隣の村々からさまざまな人々が集まってきております。石浜という知多半島

の地域から石浜権守、おそらく網元だろうと思いますけれども、その人が参加して、外に一〇数名の人々が石浜から参加しておりますので、網元とその下で働く村の人々が、すなわち浜辺の人々が一同に授戒会に参加しているのです。また、村木という村からいろいろな人が参加しておりますけれども、中には材木坐頭、おそらく目の不自由な、しかし経済的には裕福な方だと思います。酒屋、材木の中に酒屋があったというようなことがわかります。それから職業を持っている人だけピックアップして表にしてみました。それを見ますと、酒屋、鍛冶屋、紺屋、番匠大工、筏師、坐頭、猿楽、山臥等々の人たちが参加してきているということでございます。

近江の浅井氏―織田信長に滅ぼされます以前の時代でございますが―の、徳昌寺という菩提寺に伝わる戒名帳でございます。これも浅井氏を始め、いろいろな人々が参加してきております。特に浅井氏は一族、大方、後室、女房衆、息女、子息というような人たちが集まりまして戒を受けております。とくに当主の正室、あるいは側室、全部で九名の側室が受戒しております。それから一族も相当数参加しております。それから家臣の雨森氏、井関氏などでございます。さらに近江から山を越えました美濃の岩手氏。浅井氏と岩手氏は連合関係にございます。そこには徳昌寺の末寺の禅幢寺という寺がございます。それから岩手の家臣の北村氏というようなところからも多くの人々が受戒しております。それから「セイミツ大夫」等々、おそらく少し差別を受けていたと思われる舞を業としていた人々も戒を一緒に受けております。この子孫は信長に攻められて浅井の当主が切腹をする時に介錯をつとめております。そういう人々でございます。

それから「禅僧と葬儀」ですね。松堂高盛という中世の僧侶の『引導法語』を見ますと居士から始まりまして禅定門、禅門、禅尼というような戒名が授けられておりますけれども、武士と思われる禅定門以上の人たちは四七％おります。それからそれ以下の人たち、その中には舞師、鍛冶師、農民、舞者の母、というような人たちが含まれ

ている、禅門、禅尼のクラス、これは五五.四%います。半分以上がいわゆる武士ではない人たちであります。一四〇〇年代の後半くらいに活動した禅僧の語録はそうなっているということであります。もう一方の『下炬集』でございますが、これは鶴見近くの新羽とかそういうようなところで活動した禅僧のようでございますけれども、この史料を所蔵しているのは茨城県の東持寺です。そこの引導法語集が『下炬集』です。「下炬」というのはタイマツという意味ですから、引導法語のことであります。この『引導法語』を見ますと下女とか内の者、下部というような人たちは禅定門ですけれども二字しかない。他の上層農民の人たちは四字の禅定門でありますが、身分の低い人たちは二字の戒名であるということがわかります。徐々に上層農民に使用されている人たちも戒を受けるようになっていったというようなことを指摘できると思います。

それから『永平寺定書』を見ますと、瑞世のことが書かれております。二条目には、「入院居成」、寺に居たままで瑞世する人、これはいけないというようなことを言っております。ただ老僧の場合はしかたない。それから入院の置銭はどういうふうにするかというと、四条目でございますけれども、置銭は修造奉行と住職が話し合って永平寺の修理に充てる。先程もちょっと出ておりましたけれども、瑞世のお金は寺の修理に充てるというような取り決めがきちっとあったようでございます。そんなわけで永平寺では瑞世のお金は修造に充てていたということでございます。總持寺はどうなっていたかといいますと、やはり永平寺関係の史料からわかります。この史料によれば、永平寺の瑞世には疑問があるということを中国地方の竜文寺という寺が言ってきた。それに対して永平寺の住職が出した手紙の写しです。そのようなことはない、永平寺は朝廷から綸旨も受けているし、勅額も貰っている。總持寺も綸旨に任せ本寺と定められているという内容です。したがって永平寺だけでなく總持寺も、一五〇〇年代初めごろには両山とも瑞世寺院として存在していた、すなわち両本山化が進んでいたということが理解できると思いま

す。ただつぎの史料は今川領国の大原崇孚という人物が、永平寺の瑞世には疑問があると言っているんですね。ですから永平寺の瑞世、出世はないと。永平寺は不出世の寺だから、そういう禅僧には援助をしなくてよい。黄衣、紫衣を着けているのはおかしいというようなことを言っております。永平寺の以貫という住職の努力というのもなかなか実らなかったということがいえます。また、永平寺の祚棟と總持寺の五院の住職たちが朝廷に対して、禅師号を受ける時には瑞世の時とは別に納金する旨を曹洞禅僧たちに伝えることを誓っている文書でございます。江戸期には朝廷は一人の瑞世で五両入ります。永平寺も總持寺も五両ずつです。話が変わりますけれども、江戸時代には一年に瑞世した人は両山別々に三〇〇人くらいずついた。ピークには六〇〇人からで、三〇〇〇両のお金が朝廷には入ったわけでございます。それからつぎの史料でございますが、總持寺門派から擯罰されていた源翁派、殺生石を打割った源翁、この源翁派はあまりに行動が派手なものであったためもあったと思われます。總持寺も永平寺も寺を復興するために、とくに總持寺は焼けてしまった、その復興のために、どうぞ瑞世に来てくださいという運動を展開した。ついに源翁派が寺に入ることになりました。それに対して反発したのが大雄山以下関東了庵派寺院であります。書状が延べ九二か寺に飛びました。源翁派が總持寺の住職を勤めるということに反対だという手紙が飛び交った。そのうちの一通だけを挙げておきました。ここには綸旨を停止すること、總持寺が今まで我々が排除してきた源翁派に瑞世を許すなら、我々は瑞世をやめる、總持寺五院の輪番をやめるというのです。各書状の内容をまとめてみると、一番には了庵派は炎上した總持寺復興のための勧化に応じない。瑞世を停止する。通幻の像を妙高庵から最乗寺に移し、妙高庵への輪住を停止する。信州（長野県）の定信院や拈笑派も妙高庵への輪住をやめる。源翁派の名前を前住帳から削る。公文は取り返す。今まで通り擯罰することを続けるというようなことを言っているわけでございます。そして最後の書状—これは五院が作った書状です。これは源翁派は五千疋のお金を納め

て瑞世したということが書いてございます。それから、会津示現寺の大檀那は芦名氏であるというふうに書いてありまして、戦国大名の援助を受けながら總持寺への瑞世を果たそうとしたことがわかります。これに対する関東の寺院の反発というようなことでございます。

いろいろな社会の中での禅僧の活動、禅寺の活動、あるいは駆込寺の社会における貢献、領主にとっては都合の悪い場合もあったでしょうけれど、いろいろな活動をしているわけでございます。授戒会帳とか瑞世の帳面、あるいは輪住帳等々の史料を活かしながら、社会の中で禅僧はどういうことをやってきたのか。薬との関係もあります。『建撕記』永平寺の道元禅僧の伝記の江戸時代のものになってきますと、加藤景正が伝記に出てまいります。宗門寺院と瀬戸の茶碗との関係、こういうような、薬だけじゃなくて瀬戸物との関係、あるいは總持寺も永平寺もそうですけれども、門前の大工さんとかそういう人たちがその寺だけではなくて地方の寺院に頼まれて仕事をやりに行くとか、そういうようなことも考えていかなければいけないんだろうと思います。それから絵解きをやっている寺も、例えば、今須の妙応寺あるいは越前の竜沢寺等々にございます。それから問答を記録した抄物等々もございますし、いろいろな所から禅僧たちのエネルギーが伝わってくるような史料がどんどん発見されております。少しでもそういうようなものを抽出して、具体的なものをより多く発見していって明らかにしていくことも重要です。これらの事実の発見が現代社会のこれからの曹洞宗の発展にも役立てばというふうに思っている次第です。